

大学初修中国語ブレンディッドラーニングにおけるオンライン授業の設計

Design of Online Class in Blended Learning for Chinese Beginner's Course in University

趙 秀敏^{*1}, 富田 昇^{*2}, 大河 雄一^{*1}, 三石 大^{*1}
Xiumin ZHAO^{*1}, Noboru TOMITA^{*2}, Yuichi OHKAWA^{*1}, Takashi MITSUIISHI^{*1}

^{*1} 東北大学

^{*1}Tohoku University

^{*2} 東北学院大学名誉教授

^{*2}Professor Emeritus, Tohoku Gakuin University

Email: xiumin.zhao.e2@tohoku.ac.jp

あらまし：筆者らは、大学初修中国語教育において、ID 理論に基づき、対面授業と授業後の e ラーニングを組み合わせた 3 段階学習プロセスによるブレンディッドラーニング(BL)を提案し実践してきたが、今年度コロナによる全面オンライン化に対応して、複数のオンライン学習方法を組み合わせた新たな 3 段階 BL を設計し実践している。本発表では、今年度の授業設計とこれまでの実践の結果、およびポスト・コロナのオンライン授業への展望について述べる。

キーワード：大学初修中国語、ブレンディッドラーニング、オンライン授業

1. はじめに

筆者らは、大学初修中国語教育において、自習を促進し、学習意欲と学習効果を高めるため、ID 理論に基づき、対面授業、授業後の e ラーニングによる復習、及び次回授業でのテスト・発展学習からなる 3 段階学習プロセスのブレンディッドラーニング (以下 BL) を提案、実践している。

また、急速なスマートフォンの普及に対応し、短時間で随時随所にミニ学習ができるよう、e ラーニングによる復習を PC 利用からスマートフォン利用へ転換した。すなわち、スマートフォン利用の学習形態である Microlearning の設計原則に基づいて、音声機能やゲーム性等を活用した多様な練習コンテンツから成るアプリ教材を開発し、さらに学習状況を視覚的に提示するユーザーインターフェース、および学習ログを視覚的に提示する学習履歴システムを開発した。実証実験の結果、学習意欲の向上と維持、復習状況の改善、学習効果の向上が確認された⁽¹⁾。

一方、今年度はコロナ禍により、授業が全面オンライン化になり、その緊急対応として、これまで提案してきた 3 段階学習プロセスモデルを全面オンライン化の 3 段階学習プロセスに変更して、新たな BL に取り組み始めた。試行期間とこれまでのクォーター 1 の実践に限られるが、設計したオンライン授業の利点と欠点がある程度見通され、今後の授業改善、オンライン化への推進に繋げることが期待できる。

本発表は、筆者らが大学初修中国語 BL において、今年度全面オンライン化への緊急対応としての授業設計、および実践で確認されたこれまでの結果を報告し、さらに、ポスト・コロナにおける授業オンライン化への展望を述べる。

2. 初修中国語 BL のオンライン授業設計

今年度全面オンライン化への緊急対応として、3

段階学習プロセスは、段階 1 が、従来の対面授業から、オンデマンドによる新しい学習に、段階 3 は、従来の対面授業によるテスト・発展学習から、リアルタイム対話型の学習活動に、それぞれ変更した。一方、段階 2: 授業後の e ラーニングによる復習は、過去年度と同様に Microlearning 型のスマートフォン利用の復習とし、全体的に以下のような 3 段階学習プロセスの BL を実施している (図 1)。



図 1 全面オンライン化の 3 段階学習プロセス

2.1 オンデマンド型の新しい学習

まず、段階 1：オンデマンドによる新しい学習では、ISTU (Internet School of Tohoku University, 東北大学インターネットスクール) の授業収録システムで収録した昨年度の授業動画の中から、出来の良い授業の動画を選定し、編集後に YouTube から配信する。新入生たちは、こうしたリアルな授業動画を視聴することで、実際の大学授業の雰囲気を感じ取ったり、まるで先輩たちと一緒に勉強しているように、楽しく中国語を勉強することが期待できる。

このほか、教科書のスキット会話と音読練習を収録した DVD 動画をストリーミング配信し、さらに、教科書、音声ファイル、授業スライド、参考資料なども学習者に提供する。こうした多様な教材と資料の提供を通して、細やかな学習支援を目指す。

2.2 Microlearning 型のスマホ利用の復習

段階 2: 授業後のスマートフォンを利用した復習では、スマートフォンの音声機能とゲーム性を活用した発音、単語、音読、リスニング、文型などの練習を行い、知識の定着を図る。本復習用アプリ教材は、Microlearning を踏まえ、様々な動機づけ方略を取り入れて設計されており、学習者にとって気軽に継続的に復習に取り組むことができる。

また、今年度全面オンライン化により、教員からの確認やフィードバックを得にくい状況にあるが、学習者は本教材の録音再生、音声認識、正誤判定、フィードバックなどの機能により、自律的な学習の実現が期待できる。一方、教員は学習ログ可視化システムにより、容易に学習者の進捗状況を把握・分析することができ、それを踏まえながら授業運営を進めることが期待できる。

2.3 リアルタイム対話型の学習活動

段階 3: リアルタイムの対話型学習活動は、Google Meet で、発音の確認と指導、ミニ課題の発表などを実施する。本授業の学習者は、各クラス 30~40 名程のため、活動の際には、学習者を複数の少人数グループに分け、教員と TA (Teaching Assistant, ティーチングアシスタント) が、分担して指導に当たる。これにより、学習者一人ひとりに対する丁寧な指導、また、学習者同士間のコミュニケーションや学習者のアウトプット活動の促進が期待できる。

なお、現状では、リアルタイムの対話型学習活動は、毎回の授業で実施することが困難なため、1 学期に数回程度実施することとしている。

2.4 実践で確認された結果

本授業では、毎週、授業内容を配信するとともに、Google Forms で授業出席および学習者の感想・要望・質問を分析し、さらに学習ログ可視化システムで復習状況を把握している。また、リアルタイムの発音指導授業で、学習者の発音習得度を検証する。以上により確認された試行期間とこれまでのクォーター1における実践結果について以下に述べる。

まず、オンデマンド型学習で配信している昨年度の授業動画に対しては、多くの学習者は「とても分かりやすかった」、「面白かった」、「去年の授業の映像を見ながら学習することで、誰かと一緒に勉強している気分になってとても楽しかった」、「先輩方と一緒に声を出して発音することで、中国語の四声を覚えることができた」などの感想を寄せ、本授業動画のわかりやすさ、楽しさを評価している。

一方、本授業動画は、著作権法により、Web 上の歌や動画などが入った中国文化紹介部分を授業動画から削除した。例年の授業では、授業の途中で「一休み」コーナーを設けて、中国文化を紹介し、学習者の中国理解の促進、学習意欲の向上を図っている。しかし、今年度の非同時型の授業配信では、文化紹介の内容を視聴できず、学習者からはこの部分も見たいという要望が寄せられている。

次に、スマートフォンを利用した復習では、学習ログ可視化システムから、多くの学習者が積極的に取り組んでいる状況が確認された。また、学習者から「アプリを使ってしっかり練習していきたい」、「アプリをやりこんで覚えていきたい」などの感想も寄せられ、高い学習意欲が確認された。

これまでのリアルタイムによる発音の確認と指導は、発音学習終了前の計 2 回実施、自由参加形式とし、いずれか一回でも、あるいは二回でも可とした。学習者総数、7 クラス計 239 名から、150 名が参加し、このうち 30 数名は 2 回参加である。実施にあたっては、1 グループ約 6~7 名で、無理なく指導することができ、また学習者は、カメラをオフにしているため、対面授業のような緊張感がなく、気軽に発音することができた。今回、参加した学習者の発音は、従来対面授業を受講した学習者の発音にあまり劣ることがなく、よくできていることが確認された。一方、この活動は、1 グループ 7 名程度まで、また TA の補佐がなければ、実施困難と予想される。

3. ポスト・コロナの授業への展望

初修語学において、オンライン学習は、知識のインプットや反復・ドリル練習などにおいて有効であり、今後大きな活用があると予想される。一方、アウトプットやコミュニケーション活動は、対面授業の方が実施しやすいと考えられる。以上を踏まえると、ポスト・コロナの授業への展望として、提案 3 段階学習プロセスでは、段階 1: オンデマンドでの質の高い授業動画による新しい学習、段階 2: 人工知能 (AI) を活用したアプリ教材による復習、段階 3: 対面授業による豊かなコミュニケーション活動の発展学習を行い、これらによって、よりオンライン化した 3 段階学習プロセスモデルに進化させる。

4. まとめ

本稿では、今年度全面オンライン化への緊急対応としての授業設計、および実践で確認された結果を報告し、さらに、ポスト・コロナの授業オンライン化への展望を述べた。今後は、今年度の授業実践を通して、ポスト・コロナの教育変革に向けてのオンライン化の可能性を検証していく予定である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 19K00875, 19H04223, 20K03119 の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) 趙秀敏, 富田昇, 今野文子, 大河雄一, 三石大: “大学初修中国語ブレンディッドラーニングのためのスマートフォン利用復習教材「KoToToMo」の開発と実践”, 教育システム情報学会誌, Vol. 36, No. 2, pp.131-142 (2019)